



オヘア フローレス主演、
チューリヒ歌劇場の
《ドン・バスクワレ》

ヨーロッパの寒波の影響がテノール歌手のフローレスも風邪をひいてしまい、DVD 録音のために予定されていたチューリヒ歌劇場《ドン・バスクワレ》3回の公演のうち、2回をキャンセルし、1回は高音を避けたバージョンで歌ったため、急遽出演が決まった1月5日の公演がほぼそのままDVDとなる。

プロダクションとしてはここ数年見慣れてきたチューリヒ歌劇場の《ドン・バスクワレ》だが、フローレスが歌うということで、浮き足立った心を諭すかのように、地に足のついたサンティ指揮の序曲。時に優しく、時に情熱的に、自由自在にオケを操り、素晴らしい幕開けだった。そして芸達者なルッジェーロ・ライモンディが見事に演じるドン・バスクワレに笑わされているうち、真っ白なテニスウェアでフローレスが現れた。初めはか細い声のように聞こえ、病み上がりの慎重さかと案じたが、だんだん彼の世界に引き込まれていく。バルトリの内助の功か、このところ上がり調子のオリヴァー・ヴィトマーのマラテスタも、魅力的な舞台姿でファンの多いイザベル・レイのノリーナも、正当派ベルカントで歌うフローレスの前では引き立て役になってしまう。「美声ではない」という批評もあるが、私にとっては瑞々しく、若々しい、天使のような声だった。高音で少々響きの堅さを感じさせるが、超高音の安定感には満喫できる。普段はカットしてい

※P152左上に続く

るカヴァレッタの最後 Des 音を完璧にきめ、劇場内を湧かせた。

他のキャストはプレミエからほとんど変わらず、この喜劇色の強いアサガロフの演出にすっかりはまっているが、フローレスは2回目ということもあり、歌に集中する彼のスタイルからも、演劇的には浮いた存在であることは否めない。それでも、彼は歌っていてくれればそれでいいのだ、と言ってしまえるほど、歌にオーラのある歌手だ。

《ドン・バスクワレー》のDVDは、世界でも少ない。指揮者が完璧に統率するのが難しいオペラであることにも起因しているであろう。ユーロアーツから出される予定のこのDVDは、少なくともヨーロッパでは話題になるであろうと、今から噂されている。

(中 東生)

